

(悲しい)



「ここは」と言うときに限って、なんで反対にありきたりの言葉しか出てこないんでしょう？

かつて友達の奥さんが33歳という若さで末期がんになり、見舞いに行って、幼子二人と旦那さんを残していく無念さに耐えながら、それを見せずに静かに闘っている姿を見たときも、本当に、本当に、心中を察していることを伝えて励ましたいのに、出てくる言葉と言ったら

「大丈夫だよ」「きっと治るよ」「元気を出しなよ」なんていう、情けなくて腹が立つくらい月並みで、ありきたりの言葉ばかり。

あるいは、本の中での話ですが、子供がいじめを受けていると知った父親が、子供の気持ちを理解していることを伝えて、解決策とまでは行かなくても、なんとか有用で気の利いたアドバイスだけでもしてやりたいと、あれこれ考えるのですが、いざ子供が帰ってくると、口をついて出た言葉が

「なんかあったらお父さん、相談に乗るよ」

と嫌になるくらい気の利かない言葉。

で、子供も「え、何のこと？何にもないよ」とエスケープ。

話は少しずれるかもしれませんが、かつて向田邦子が自分の話だったか作品の中での話だったか忘れましたが、大切な人を亡くしたのに、悲しくて辛くてやり切れないのに、それでもお腹がすいて、ご飯を食べる「その自分が一番悲しい」といっていたのを思い出しました。本当にひとつ「ここは」というとき、どうも反対に、ありきたりでありふれていて、月並みなことしか言えなかったり、しなかったりするみたいな気がします。

そうしてそのことが、とっても悲しかったりするのです。